鉄砲洲神社詩吟　素読論語解説
（平成 25 年 6 月 14 日）

【二十三】子貢　友を問う。子曰く、忠告して善く之を道き、不可なれば則ち止む。自らを辱しむること毋かれと。

子貢が友について孔子に質問をしました。「友とは、どういう友が良いのか」という質問です。それに対して孔子は「忠告をする時に、真心を持って自分の意を相手に告げて、善を導き出すようにする。もしそれが、聞き入られないようであれば、それ以上強く言わない方が良い。それ以上の場合は自分を辱める結果にならざるを得ない」

私の体験談を申しますと、色々とお付き合いがある中で、ある社長さんとお付き合いをしている時に、その社長は経営方針を持っていないし、これは潰れるなと思い、私は真心を込めて「あなたの経営方針だと会社を潰すから、心を入れ替えて一所懸命に経営方針を考え直した方が良いでしょう」と言ったのですが、相手は茹でダコのように怒りまして、言えば言うほど相手は怒る。潰れっこないような状態なので「このままだとあなたは会社を潰すよ」と言った訳です。相手は潰れっこないという自信がありましたから「そんなことはない、そんなことを言うのなら絶交だ」と言われて絶交をしましたが、それから数年経って潰れました。潰れた時に相手が聞く耳を持っていれば、少しは変わっていたかもしれない。私の言い方が悪かったのかなと多少は反省したのですが、聞き入れない相手が悪いやと思っていました。どういう訳か私はお節介でして何回か似たようなことを繰り返しています。また友人の社長に「このまま会社を続けていくと会社を潰すから、もう少しまともに仕事をしなさい」とアドバイスをしていたら、たまたま友人の持っている土地が売れてお金がゴソッと入った。「そのお金どうするの」と聞いたら、その友人は「これはラッキーでお金が入ったから女房と分けるよ」と言ったので、「それは良いことだが、忠告しておくと奥さんはきっとヘソクリとして貯めるから、絶対奥さんの貯めたヘソクリには手をつけてはいけないよ。あなたは経営方針が悪いから、後で資金繰りにつまって、その後、奥さんのヘソクリにも手をつけかねない。手をつけたら潰れるよ」と。手をつけたらいけないと何度も念押しをしました。ニコニコして「分かった、分かった」とは言っていましたが、何にも私のアドバイスを実行しませんでした。それから数年経って潰れました。潰れた時に私が相手に言ったのは、「地元から離れてはいけない。首を括ってはいけない。借金を棚上げにしてはいけない、必ず返してやりなさい」というアドバイスをして現在に至っています。そういう経験で今私がアドバイスをしようとしている人達に向って言う時、「潰れるよ」と言うと逆恨みをされる。下手したら「あいつが潰れると言ったから潰れたんだ」と言われたらかなわない。でもやはり氣になるので、潰さないようにアドバイスを

したいなと思います。論語の科白の通り、「忠告して善く之を道き」で、真心を持って相手に伝えようと思っても相手に受け入れる氣持ちが無ければ、「不可なれば則ち止む」ということで、止めてもいいです。止めてもいいのですが、その会社の身内の方に頼まれているから忠告をしたいと思うのですが、「自らを辱しむること毋かれ」というのは、自らの体験から申せば、逆恨みをされると感じるものです。侮蔑の対象になるという意味ではなく、逆恨みをされ何をされるか分からないという風に、ここら辺は意識して聞いています。

自分自身の体験談と現象を照らし合わせながら考えていくと感じることが多いと思います。他所様に心から忠告する時には、適当なところで止めると良いのだろうなと感じます。

【二十四】曾子曰く、君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く。

曾子が、「君子たる者は、学問をもって友と集まって向上するのは君主としては普通のことである。友がいてこそ自分自身の仁の完成を目指す時に、友の助けが必要となるものだ。またそのような友を持たねばならない」ということで友の重要性を言っています。